

そこで昭和五十四年四月初、本児の行動の高度化を図るため、次の三つの段階を踏んで見通しをたてた。

① 不安や緊張状態を少しでもやわらげる対応として、本児の行動に対して拒否的な態度をとらないようにする。比較的歪んだ行動の発現しにくい、戸外体育館での活動を多く取り入れる。

② ボデイ、イメージの形成を促進させ粗大運動の発達を促す。また、固定遊具などにも興味を持たせながら、一人でも遊べるようにさせる。

③ 外界に対する適応行動がとれるようになるには種々の雑然とした事象を整理してやり、それが行動調整の力になっていくのではないかと考え、種々の弁別学習を取り入れながら、平行して手指の訓練も続けていく。

(四) かかわりの経過(表2)

本児とのかかわりに当たっては、個別にかかわる時間を見つけ、情緒の安定した状態をねらって実施した。また施設とも連絡を密にし、一日の生活の状況がいつも把握できるようにした。

三 考 察

重い障害の子供を知るには、直接かかわり、子供の行動を観察し、そこから疑問点の解決にとりかかる過程が大切であるように思われた。「障害児教育は考えることにある」とは先人の言葉であるが、そこからそそぎた教材

表2 取り組みの経過

取り組みの見通し	課題と場面設定	児童の活動と反応	問題の整理
二(一)① での取り組み	1. 歩行訓練をかねて戸外を自由に歩かせる。 2. グラウンドで遊ばせる。 3. 音楽(童謡、行進曲)に合わせて、集団で歩いたり、走ったりする。	・ 戸外では表情もやわらぎ、異常行動が発現しにくい。 ・ 固定遊具への関心はうすかったが、教師(以後①とする)を促して、ぶらんこなどにも乗りたがるようになる。 ・ 体育館では他の児童のうしろをつかんで列をつくり、少しの時間だが、全員と音楽に合わせて歩く。音楽に合わせた体の動きも見られる。	・ この段階では、施設とも本児とのかかわり方について検討し、危険なことや時間の始め終わりを守らないとき以外は本児の要求を受け入れるようにした。 ・ 体育館や戸外での活動は1学期と2学期の始めにくりかえし行った。これは、集団参加への手がかかりとしての意味があったように思われる。
二(一)② での取り組み	4. カラートンネルくぐり。 5. トランポリン(マット運動、平均台もとり入れる)。	・ カラートンネルでは恐怖心をあらわにし、緑にしがみつきくろうとしなかったが、①といっしょに入ったり、トンネルの中に好きなおもちゃを入れて徐々に慣れさせ、恐怖心を除いてやり、くぐることができるようになる。 ・ トランポリンでは、補助バーをにぎり、リズムミカルに跳ぶことができるようになる。	・ これらの訓練を通して、いくらか落ち着きも出て来た。自分の席で朝のあいさつについて呼名反応なども形成され、①には依存的ではあるが関係も密になっていった。 ・ 上述のことを考え、課題学習(ここでは弁別学習)に入れる基盤ができていくように思われた。
二(一)③ での取り組み	6. 色弁別学習 7. 形態弁別学習 ・ 形態弁別板による。 ・ 立体弁別箱による。 ・ 各面一個の形態見本のあるもの。 ・ 各面二個の形態見本のあるもの。 ・ 各面三個の形態見本のあるもの。	・ 二色の弁別より入るが、課題の意味が理解できないうちは単におもちゃとして遊んでいる。 ・ 色を見る手順、正答を確認できるようにしてやると、三色、五色と弁別できるようになる。 ・ 形態弁別板(はめ込め式)では、○△□などの正答率が高いが、▽△方向でしかはめられないものでは正答率が低い。 ・ 立体弁別箱では偶然が成功を導く確率が少なく、いやおうなく探索行動が要求され、かなり集中する場面が見られた。	・ この色弁別が完全にできるようになってから、できるだけ早く色ピースを棒にさすよう指示し、次から次とピースを渡し、考えなくても同じ色の棒にさせるような訓練も合わせてする。これは指示をスムーズに受け入れられる素地をつくることのできたように思う。 ・ 形態弁別板での学習では偶然が成功へ導く比率が多く、そこで、市販弁別箱よりヒントを得て、箱型のものを三通り作った。 ・ 立体弁別箱での探索行動の発現順は④上だけを見る。③左右前後の面を見る。②底の面も見る。そして①→②への探索ができるようになる。また、この時期では排便の習慣も自立しかかっており、ボタンはめなどもできるようになり、表情もやわらぎ、笑顔をよく見せるようになっていた。



・ 教具の工夫とその活用ができることである。

事例では情緒的な問題が取り組みのきっかけとなり、その問題と直面したところからかかわりの見通しができたわけである。しかし、まだまだ、本児に残された問題は多く、自分で行動調整ができる段階までは達していない。だが、本児への指導の糸口の一端はどうか見つけ出すことができたように思う。

四 おわりに

今後、重度・重複児といわれる子供たちとかかわる中で、指導計画はもちろんだ切であるが、一人一人のニーズを見きわめ、いま与えなければならぬ手だてを考え、実践することが大切である。そして行動観察への目を養い、特に、常同行動やその他の問題行動といわれるような行動の影にひそんでいる精神活動の芽といえる行動に目を向けていきたいものである。